
それはどこかで願われた。

津森太壱。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それはどこかで願われた。

【Nコード】

N4440BA

【作者名】

津森太壱。

【あらすじ】

国境にほど近い辺境の山火事を鎮めた魔導師が出逢ったのは、運命に素直な混血の少女だった。

00 : お互いに誰か知らない。(前書き)

ようこそおいでくださいました。

初めましての方もそうでない方も、こんにちは。

たまに造語がありますので、お気をつけください。

00 : お互いに誰か知らない。

おまえは力があるのか。

と、驚いた顔でマルを見下ろしたのは、母だったのか父だったのか。それとも両親揃ってのことであつたか。

そうか、力があるのか。さて困つたな。

言葉のわりにはそうは見えなかったが、そんな態度を取られた気がする。

なんのことを言われているのか、その当時はまったく理解できなかったが、あるときふと突然、目の前に黒い外套を羽織った国の役人が現われて、マルの世界は一変した。

マルは魔導師になった。

「は！」

「！ うわ吃驚した……いきなり起きるなよ」

「死ぬかと思った」

「水ん中で気絶してたら、そのうち死ぬだろうね」

「助けてくれてもいいだろう」

「濡れたくないもん」

「なら起きたことに驚くな」

「死んだかと思って」

「薄情者だな」

「どうも」

死にかけていたせいか昔の夢を見ていたらしい。いや、あれは走馬灯というのか。危なかった。とにかくにも息を吹き返すことができて幸いだ。しかし、全身びっしょりと濡れていては、気分は急降下する。

「この湖、あんたがやったの？ それならただの水溜り……にしちやあ、でか過ぎるけど」

「ああ、わたしがやった。うっかり巻き込まれたが」

「自分の力に巻き込まれるってどうかと思う」

「わたしも不思議だ」

「こんなとこに湖なんか作っちゃって……どうすんの、これ」

「山火事を止めようとした結果だ。この結果がどうあれ、文句を言われる筋合いはない」

ぐしょぐしょの服をどうしたらいいものかと考えながら、裾や袖を絞っていくらか水気を切る。そのくらいで乾くわけもないから、さっさと宿に戻ろうと思う。

「まあ確かに鎮火したけど……ところで訊きたいことがあるんだけど」

「なんだ」

「あんた誰？」

「偶然だな、わたしもそれは訊きたいと思っていた。きみは誰だ？」

さっさと戻って沐浴して、さっぱりと着替えて寝台で眠ってしまいたい。

なのに、要らない疑問が増えた。

00 : お互いに誰か知らない。(後書き)

誤字脱字、その他なにかありましたら、こっそりひっそり教えてくだ
さいませ。

01 : 偶然であれ必然であれ。

「ああ、やっぱりあんたがああ『マル』か」
「なんだその言い方」

初対面だった彼、もとい、どうやら服装が少年なだけである彼女は、この辺りに住む街の住人のようだった。このユシユベル王国では珍しい、一見すると黒っぽく見える焦げ茶色の髪と、稀に見る深緑色の双眸がとても印象的で、おそらく移民してきたか、或いは両親のどちらかがユシユベル出身の混血かと思われる顔つきをしていた。

「ここに魔導師が寄越されたって聞いて、どんな人なのか聞いたたらみんな遠い目して『マル』って名前だって教えてくれたんだよ」

なんというか、と思う。

「わたしが派遣されたことに文句があるのか……」

いやべつに、寂しいことだとか悲しいことだとか、そうは思わないが、だからといって自分の存在が遠い目をされるほどのものではないと、マルは思う。

「どんな魔導師かと思ったら……けっこう間抜けな魔導師なんだ？」
「この状態になっていることを言うなら、余所見をしていたただけだ」

「どんな言い訳よ、それ」

「事実だ。ところで……きみはなぜここに？」

鎮火したとはいえ、先ほどまで山火事が起きていた場所に、女性がひとりとはどうしたことか。誰でもそう思うだろうことを訊ねると、彼女はこくりと首を傾げた。

「あんたを見に來ただけだよ」

「……。きみには危機管理能力がないのか？」

「暇だったんだ。つい先日、解雇されちゃってさ」

「下手をしたら死んでいたぞ」

「だって死んでもよかったし？」

「は？」

とんでもない言葉を聞いた気がして、思わずマルは裾の水気を絞った姿のまま固まる。

「どこに行っても不気味がられるんだよねえ、あたし」

「？ それは容姿のことか？」

「あ、やっぱりわかる？」

「髪の色は特徴的だが、瞳の色は王都でたまに見る。だが顔つきはユシュベルの者と少し違う」

「あたし混血なのよ。母親がユシュベルの人で、父親は隣のジェサントス公国の人。父親に似たから、顔つきはジェサントスのほうだろうね。だからずっとジェサントスのほうにいたんだけど、やっぱりあっちでも不気味がられて」

「その容姿を？」

「ジェサントスでは目の色、ユシュベルでは髪の色、だね」

人種差別を受けたのか、とマルはげんなりする。

まったく、人間とは気難しい。周りと同じということが安心感を生むのだろうが、だからといって持った色が違ってくるくらいで差別するとは嘆かわしいことだ。

「おまけにあたし、妙なことができるもんだから、それが拍車をかけてさ。ジェサントスではひどかったよ。バケモノ扱いだもん。その点、ユシュベルは魔導師がいるからいいね。あんた魔導師じゃないの？　だって」

「……魔導師なのか？」

「あたしに聞かないでよ。だからあたし、ここにいるんだから」

彼女は自分の言葉に責任を持っているのだろうか、と一瞬だが疑心暗鬼になる。

「わたしがいなかったらどうするつもりだった」

試しに訊くと、やはり彼女は暢気にも首を傾げる。

「死んでたんじゃない？」

彼女がなにをしたいのか、マルにはさっぱりわからなかった。

「あんたがいればあたしはこれまでの人生とまともに向き合えるし、あんたがいなけりゃ、あたしはそんときの運命を受け入れるだけだよ」

投げやりな言葉に、彼女は自分の言葉に責任を持っているらしいと思う。前向きに言えば、彼女は自分の運命を信じてわが身を危険に曝したようだ。

「……わたしになにを言わせたいんだ？」

「あたしは魔導師なの？」

彼女の問いは直球で、しかしマルには答えられない問いだった。

「わたしは個人が持つ魔導師の力を測れない」

「え、魔導師ってやつぱりそういうのわかんの？」

「高位にある魔導師であれば、見ただけでわかる。生憎と、わたしはそこまで力はない」

「へえ……まあ、あんたなら、街の人に遠い目で名を語られるくらいだし？ あんまり力ないんだろ？ なんて思っけど」

よくもまあずけずけと失礼なことを言う娘だ。傷つくほど若くはないのでなんとも思わないが、こんな国境近くの山で、まさか魔導師の力を持っているらしい混血に逢おうとは思っていなかったのが、心境的には複雑だった。

「きみは、わたしに拾われるために、ここへ来たわけか」

「拾われなかったときは死ぬだけだよ」

からからと笑って己れの死を安易に口にする彼女に、マルの胸中はさらに複雑さを増した。

魔導師の力を持つ者を見つけた際、速やかに魔導師が派遣され、その者は国に保護される。それは魔導師が、この国の防衛の要であり、また貴重な存在であるからだ。

マルは予想外に、魔導師を見つけてしまったことになる。それは、彼女を拾わない、という選択肢がないことを意味していた。即刻、彼女を王都へ連れて行き、王陛下と魔導師団長に真偽を確かめてもらい、師を探してやらねばならないわけである。魔導師を見つけた魔導師の、これは責任だ。

「余計な仕事が増えた……」

国境近くのことまで来るのも大変で、漸く一仕事終え、ゆっくり地層調査しながら帰還しようと思っていたのに、なんという偶然だろう。いや、これは必然なのか、と首を傾げなくなる。

今回の任務であつた山の鎮火は、べつにマルでなくほかの魔導師でもよかった。国境まで赴くため往路の地層調査任務も含まれていたので、長い時間ひとりになる時間が欲しかったマルが自ら進んで引き受けた任務なのだ。

仕事を少し休みたかった、という下心が、この偶然を引き寄せたのなら、これはもう必然だ。休むなということである。このところずっと任務続きで休む暇もなかったというのに、いつになったこの国の天災はマルという魔導師を休ませてくれるのだろう。

「ねえ、あたし魔導師なの？」

再び問われ、マルは長々と息を吐き出した。

「拾ってやろう」

偶然であれ必然であれ、魔導師の力を持つ者を放置しておくことはできない。国のためではなく、魔導師の存在のために、それは必要なことだった。

02 : どこに行けばいいのかも、わからないなら。

山火事の事後処理は、マルが湖を作るという結果のせいであろうと面倒なことを招き寄せたが、最終的には山火事は収まったのだからと国からのお咎めはなかった。ただし、あとでその湖を埋めるための魔導師が派遣されることはなった。なぜマルが自分でやらないのかというと、それはマルが持つ属性にある。

マルは『水萍すいひょうの魔導師』と渾名される、言葉の意味とは遠からず近からず水を操る魔導師だ。火事や日照りには重宝される属性の力を持つているが、その反面、水と相対する属性も水以外の属性の力も使えないという、少々癖のある魔導師だった。

「ユシユベルって、貴族に翼があるって聞いたんだけど」

「翼種族がユシユベルの根源だ」

「へえ……あんたにもある？ 魔導師だから貴族なんだよね？」

翼ある者が貴族、その中から魔導師は生まれる。マルが魔導師なら、それは貴族であることを意味していた。そのことを彼女は知っているらしい。

「残念ながら」

「貴族じゃないの？」

「飛べない」

「？ どういうこと」

「翼はあるが、わたしは飛べない」

マルは確かに貴族だ。背に翼もある。だが、マルの背にある翼は、その自由を得ようとは思わなかったらしい。翼があるのに勿体ない、と思うことはあるが、べつに困ってもいないのがマルである。

「なんか、悪いこと訊いちゃった気がする……ごめん」

「？ なにを謝る」

「その……飛べないって」

「わたしは困らない」

「でも、あんた貴族で……魔導師でしょ」

気にしてくれたらしい彼女に、マルは小さく息をつく。

「魔導師に身分は意味がない」

「え……そうなの？」

「そもそも興味がないからな」

身分に興味がないから、そういう態度だから、彼女も気軽な様子でマルに声をかけたと思うのだが、考えてみれば彼女は自分の運命に対してどこか楽観的な部分が多い。だが、だからこそ、貴族に不遜な態度を取ったことで殺されることも予想していたと思う。彼女の死への覚悟は、本気だったと思えない。

「こっちの人たち、優しいな……うん」

「やさしい？」

「ほら、あたしっていかにも混血、でしょ？ ジェサントスでは、けっこう、目立って……母さんが死んで居場所がなくなって、風あたりがきつくなって……ユシユベルに来てみたら、ジェサントスとはちよつと違って……珍しいなって見られるくらいで済んだ」

「……仕事を解雇されたのはその容姿のせいではないのか？」

「大部分はそうだけど、言ったでしょ、これまでの人生と向き合い

たかったって。妙な力のことが気になって……母さんはあたしの力のこと、なにも言わなかったけど、それはジェサントスにいたからだし。ユシユベルに来て、もしかしたらこれって魔導師の力なのかなって思っただけだし。もし魔導師が来たら訊いてみようって、前から思ってたんだよ」

どうやら、彼女が仕事を解雇されたのは、彼女が持つ魔導師の力が原因らしい。

当然だな、と思う。

受け入れられはする魔導師の力は、けれども力なき者にすれば、バケモノと変わらない。マルはそう思っている。だから魔導師は国の管理下にあつて、統括されている。さまざまなことから護るために、護られるために、そして力の使い方を誤らないようにするために、魔導師は育てられるのだ。

「きみはいくつだ？」

「歳？ ええと……十三のときに母さんの伝手でユシユベルに来てから、季節が六つか七つくらい過ぎたから……たぶん十九あたり」

遅い、と思う。魔導師の力を持ってその教育を受けるには、むしろ彼女がユシユベルに来たという十三歳のときがよかっただろう。もつと早くになぜ彼女を見つけられなかったのだと、自分たち魔導師に少々呆れる。

「力の自覚を持ったのはいつだ？」

「六歳くらい、かな」

力の目覚めから十年以上も経っている。これでは、今からの教育はもしかしたら難しいかもしれない。彼女の師には、熟練の魔導師か、或いは魔導師団長が一番だろう。

「ここから王都まで、しばらくかかる。その間に、本当に魔導師になるかどうか、決めるといい」

「？　なんで選択肢があるの？」

「魔導師に関して、大きな事件は聞こえてこない。それはつまり、きみが特に面倒を起こしていないということだ」

「騒がれるくらいの力はない、ってこと？」

「言い方は悪いが、そうだ」

「騒ぎを起こしたほうがよかった？」

「起こしたくなくても起こるものだ、と言い直そう。魔導師の力は、そうだと言われなければわかる力ではない」

くしゃ、と彼女の表情が歪む。よくわからなかったのだろう。

マルは腕を水平に持ち上げ、握っていた手のひらをゆっくりと開く。彼女の視線がそこに移るのを確認してから、意識を手のひらに集中させた。

「わ……っ」

最初は小さな水滴が一つ、それが徐々に増えていき、一つの水塊になる。両手に収まるほどの大きさになったら空に放り、戻れと命じる。留めておく力を失った水塊は一気に蒸発し、それまであった水気を消失した。

「い、今の……！」

「空気に混じる水に呼びかけた。これくらいなら錬成陣や詠唱は不要だ。だが、こんな力がその辺に溢れているか？」

「あたし初めて見た！」

「きみは好奇心にかられるようだが、一般的には好奇心よりも、人

ならざる力に恐れるものだ」

「え、なんで？　ただ水を手のひらに集めただけで……」

「わたしはこの力で、なにをしていた？」

「山火事を鎮めて……湖を」

彼女が、ハツとしたような顔をする。どうやら頭の回転は速い。

「わたしは魔導師だから、咎められることはない。だが、魔導師という肩書きがなければ、どんな視線をもらっていたことだろうな」

「そんな……だって、山火事を鎮めて、街の人を助けたのに」

「魔導師だから、助けた、ということになる。だが魔導師でなければ、それはただの暴力にも等しい」

魔導師、という肩書きは、さまざまなものから魔導師を護る。同時に、その力を持った者を戒める。魔導師の力だ、と言われなければ、その力はただ危険なものにしかないのだ。

「これまできみは、おそらく数多の奇異な視線を受けたことだろう。魔導師の力は間近で見ても理解し難い。バケモノと謗られたこともあるだろう。だが、きみが魔導師になることで、われわれはきみを護れるようになる」

「……魔導師、ていう肩書きが？」

「ああ」

本来は、そういったものから護るために、力の目覚めからすぐに魔導師のもとへ導かれる。その庇護下に入ること、力のない人々からの言われなき暴力から護るのだ。それは自己防衛のようなものでもある。

恨みや憎しみが生まれる前に、その根を絶つことを優先された仕組みが、ユシユベル王直下魔導師団だ。

「……騒がれるくらいの力があたしにはないなら、魔導師になる必要はない？」

「力の大小は関係ない。ただ魔導師になるということは、国に護られるということだ。国に縛られると言ってもいい。これまでの自由はどこにもない」

言うなれば、混血である彼女の場合、もう二度とジェサントスへは帰れないということだ。ジェサントスを故郷と呼ぶことはできるだろうが、魔導師の肩書きを持つ以上、ジェサントスで暮らすことは難しくなる。

だがそれ以前に、魔導師の力を完全に受け入れてしまったら、そんなことすら考えていられなくなるだろう。きっと、周りの人々の言葉や目など、気にしていられなくなる。いや、気にする必要がある。

魔導師になる、ということは、ある意味、人間を捨てるということだ。

だから、魔導師という肩書きで、護られる。人間から遠くなってしまった魔導師は、人間の世界に関心を失ってしまうのだ。それがもし、その関心が人間に向いてしまったとき、いったいどんな破滅が待ち受けていることだろう。力なき人々はきっと、魔導師に滅ぼされる運命にある。

そんな世界があつてはならない。

ユシュベルという国は、よくそれをわかっているとマルは常々思う。

「あたし、居場所がないの」

ぽつりと、彼女がこぼした。

「どこに行っても、あたしには居場所がないんだよ……ユシユベルに来て、あたしの居場所はなかった。外見の問題でも、妙な力の問題でもない。ただ、あたしには居場所がない。どこに行けばいいのかも、わからないの」

どこか遠い場所を眺めるような彼女の視線に、ああこれはもしか手遅れか、と思う。居場所がない、というのがマルの思っているようなことなら、彼女はもはや魔導師になるしか道はない。

彼女はもう、魔導師が囚われてしまうものに、囚われている。

「……魔導師になるか？」

早計だと、思わなくもないが、居場所がないというのは魔導師の力のせいとしか思えない。いや、魔導師の力のせいだ。

彼女は視線をマルに戻すと、深い緑色の双眸で見つめてきた。

「あたし、魔導師になれる？」

なにかが変わるなら、変わりたい。これまでの人生がなんなのか、知りたい。

彼女の瞳が語るものに、マルは目を細めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4440ba/>

それはどこかで願われた。

2012年1月13日00時59分発行